

2020年11月30日 1面

文字サイズ 小 中 大 [ブックマーク](#) [印刷](#) 

## 新社長／前田道路・今泉保彦氏／新たな収益基盤を確立



今泉保彦氏

社長就任から5カ月余り。積極的に現場へ出向き、社員の声を聞くことに心を砕いた。「出来栄を見て『前田道路の品質だ』と分かるくらい品質重視の会社にする」のが経営トップとしての目標。市場や社会が変化してもきちんと収益が確保できる基盤の構築にも力を注ぐ。前田建設との連携をより密にしてPPP/PFI、コンセッション（公共施設等運営権）事業など新領域への参画も目指していく方針だ。

――就任から5カ月余りが経過した。

「現場などに出向いて社員との対話を重ねることで地に足の付いた経営をし、社員に信用される会社になりたいと思っている。2030年に創立100周年を迎える。100周年に向けて重点施策を立てていくことになるが、社員の納得感がある施策でなければ絵に描いた餅になってしまう。十分時間をかけて話し合い品質重視の前田道路を実現する施策にしていく」

――経営課題をどう捉えているのか。

「コンプライアンスの徹底による体質改善、生産性革命、新たな収益基盤の確立の三つが当面の課題だ。21年4月にスタートする中期経営計画に対応策を盛り込む。特に収益基盤の確立は、現在の建設、製造というビジネスモデル以外の新規事業を模索する。道路の新設計画に期待する状況ではない。製造は出荷量が減少している。生き残りの方法を考えなくてはいけない。道路のコンセッションなどは前田建設が先行して取り組んでいるので、そのリソースを活用して取り組みたい。新型コロナウイルスの流行で社会は大きく変化している。このような変化に耐えられる収益基盤を確立する」

――前田建設との連携をどのように深める。

「まずは道路コンセッションで連携し、総合インフラサービス企業の一員になってサービスを展開する。当社と前田グループで人材を適材適所に活用することも考えており、来期には少人数の人材交流を開始したい。現在、前田建設から受注する工事はわずかだが、連携の強化に伴い受注比率を増やしていく」

――生産性革命の実現策を。

「ICT（情報通信技術）施工を進めるだけでなく、デジタル技術を活用した検査の一元化など、効率化に取り組む。道路舗装の工事は重機を使うことが多い。重機が取得したデータを活用するなど、DX（デジタルトランスフォーメーション）に取り組み、品質や生産性の向上につなげる。生産性革命を実現するには時間とコストが必要になる。今後2～3年をかけて社内のITインフラを整備する設備投資も実施していくつもりだ」。

（6月25日就任）

(いまいずみ・やすひこ) 1981年成蹊大学法学部政治学科卒、前田建設入社。2010年執行役員建築事業本部企画推進部長、17年取締役兼専務執行役員建築事業本部長。秋田県出身、63歳。社長に就任してから松下電機（現パナソニック）グループを築き上げ、経営の神様と呼ばれた松下幸之助の言葉「企業は人なり」を大切にしている。

記事ID : 3202011300102

---

Copyright(C) 日刊建設工業新聞 記事の無断転用を禁じます